

HIMALAYA

ヒマラヤ
No.326



1999 JANUARY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1999年H A J 登山隊員募集

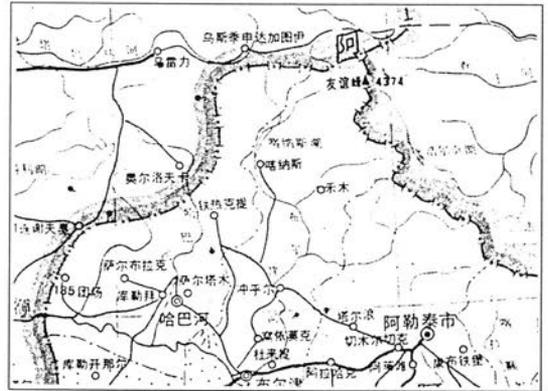
アルタイ(中国側)の最高峰へ行きましょう

中国、モンゴル、ロシア、カザフスタン四国にまたがる「アルタイ」山脈は、約2000kmにも及ぶ大山脈です。その最高峰はロシア側にあります。今回は、中国、モンゴル国境付近にそびえ立つ「友誼峰・4,374m」が目標です。モンゴル側では古くから「タバン・ボグド」と呼ばれ、その主峰は「フィティン・4,422m」とされています。

モンゴル側からは、何登もされている山ですが、中国側からは「未踏」です。かつて1988年に開高健が巨大魚を求めて探索した「ハナス湖」を船でわたり、更に奥に分け入りこの主峰を目指してみませんか。興味のある方は、H A J事務局へ連絡下さい。

記

1. 日時：1999年7月24日(土)から28日間程度
2. 募集人数：約10名
3. 費用：65万円



引き続き募集中!!

- カバン峰 (6,717m) 未踏峰
- チョム・カンリ (7,048m)
- ニンチン・カンサ (7,206m)

表紙写真

グンの部落からヤクの放牧されている川をつめて行くと晩秋のチベットの青空の中に大岩塔に守られるように未知・未踏のカバン峰(6,717m)が聳え立っていた。右はスノー・ピーク(約6,500m)で頂上は隠れて見えていない。
(山森 欣一)

ヒマラヤ No.326

1. 未踏の頂 カバン(6,717m)偵察報告
18. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
20. ヒマラヤ登山遭難事故 ネパール・ヒマラヤ編(2)
24. 寸感・事務局日誌

未踏の頂 カバン(6,717m)偵察報告

〔付〕ヤンラ・カンリ北面を探る

日本ヒマラヤ協会カバン峰偵察隊

■はじめに

1996年9月30日午前11時半、マ・ラ(5,234m)に立った私は、正面に美しい姿を見せる雪山を見た。マ・ラはチベット登山協会との合同登山の目的であったヤンラ・カンリ(ガネッシュ・ヒマール主峰)の玄関口のジーロンに入るために越えなければならない高い峠であった。その山が「カバン」と分かったのは帰国後のことであった。

早速許可申請を行い、隊員募集を行ったが、未開放地区であることから許可は難航した。6千米峰であること、負担金が百万円近いことなどもあってか隊員募集に応じたのは3名であった。登山を延期することを応募者に通知した後の正月明けになって正式許可が出た。

中国側に登山延期の連絡をしたが、先方にも都合があって今年何とか実施して欲しいとの要望であった。そこで今年(1998年)偵察、1999年本隊派遣を申し入れ受け入れられた。早速クーラ・カンリⅡ合同隊の仲間であった樋上と太田に偵察の誘いを行った。どちらか一人と私の2名の予定であったが結局3名で行くこととなった。

今回の偵察の目的は二つであった。「カバン峰の登路を探ること」、「1996年に果たせなかったヤンラ・カンリ北面の登路を確認すること」である。短い期間ながら二つの目的は達成することができた。成功の原因は二つ。「時期がよかった」、「メンバーに恵まれた」。

以下に偵察の概要を報告する。(記：山森欣一)

■BCをめざして

10月10日～14日 私は成田から樋上と太田が関西空港から出発し北京で合流し成都からラサに入り、荷物の整理と順応を行う。

15日～17日 ラサをジープ2台で出発する。今回は偵察ということもあって通訳とコックは勘弁してもらった。連絡官はチョモランマに二度登頂経験のあるチベット族の開村(33歳)である。シガツェ→ティンリと泊まりマ・ラを越えてジーロン県に入る。ここで連絡官はカバンでの輸送関係の情報収集に行く。我々は竹と野菜を仕入れに町に出るが野菜は全く無いとのことであった。竹はたまたま入った店の裏庭にあったものを貰った。ジーロンの町は殺風景であるが、泊まった招待所の窓からカバン峰やチョグラリ峰(6,514m)が見えるのが嬉しかった。

18日 標高4,127mのジーロン県は全天雲に覆われていて暖かい。9時40分カバン峰の麓の案内人に乗せて出発。ジーロン川の左岸を1時間ほどで最奥の部落である「グン」の登り口である「グング」に着く。ここから川と離れ車で10分ほど急登した所が平らな台地になっていて4,150mのグンがあった。ここの畑に2張りの天幕を張った。すぐに40人ほどの村人たちが集まる。明日は隊員でBC予定地を偵察し20日にBCへ移動することを連絡官に伝えポーター集めを依頼する。夕方中国側の3人(運転手2人を含む)を交えて日本酒を開けて酒宴。

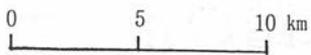
19日 夜半断続的に雨音がした。9時小雨模様の中3人でBC予定地の偵察に向かう。目の前の斜面に広がる畑の中を一登りして右岸側につけられた踏み跡を辿り川に降りる。いつしか左岸側に移り2時間半ほどで川が右に大きく曲がる地点に到着。ここから一時間ほどでBC予定地に到着した。(記：山森)

■エンド・モレーンからの観察

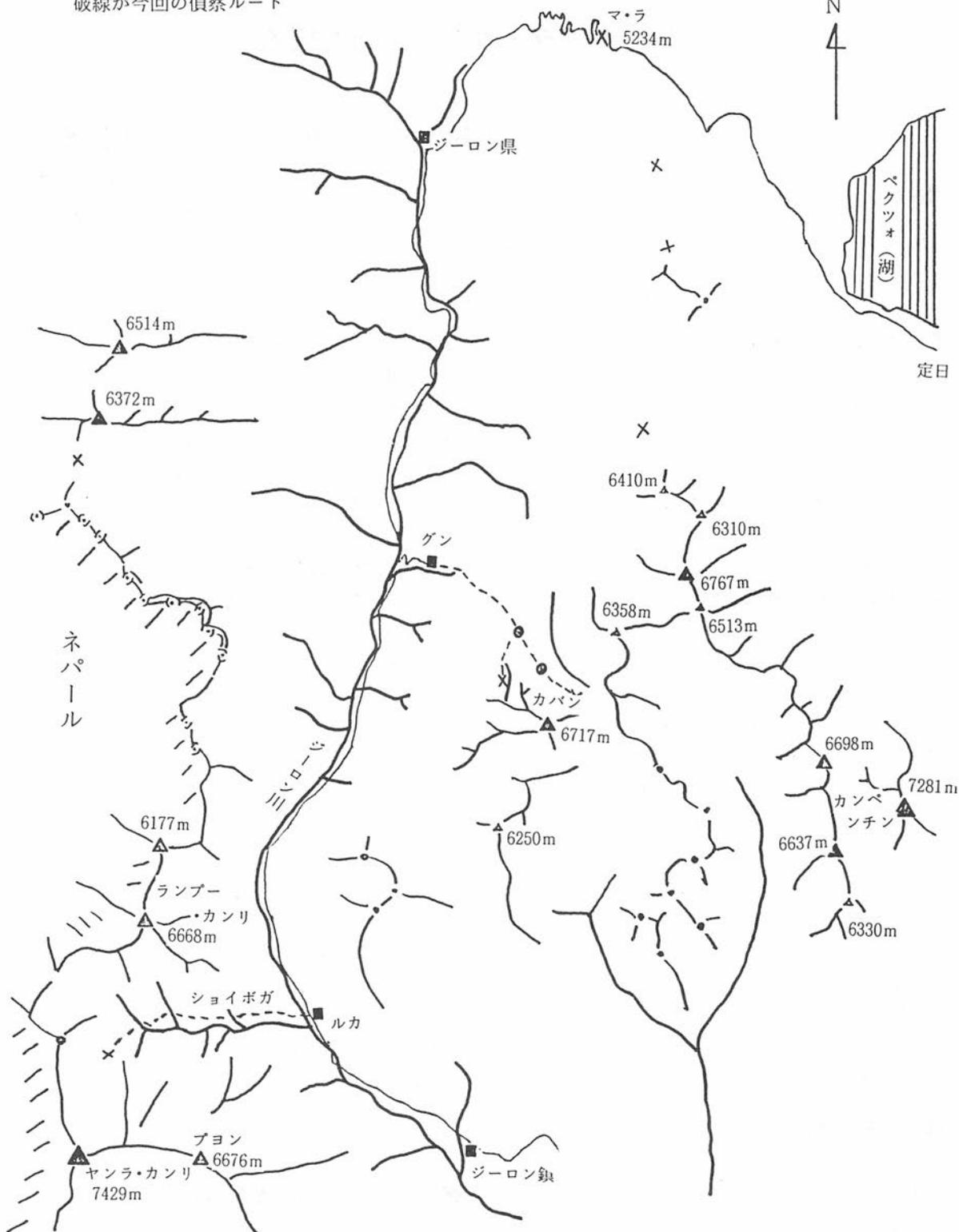
19日

カバン峰・ヤンラカンリ北面 周辺概念図

作図：太田
1998.11.20



破線が今回の偵察ルート



BC予定地到着後、樋上と太田の二人でナス氷河先端に堆積したモレーンの上まで偵察に出掛ける。一寸した山のように谷の中央に大きな盛り上がりを見せるモレーンは左岸からの支氷河が出合う地点少し上流に、行く手を阻む形で堰堤の如く谷幅一杯に広がり、本流の氷河に入るには一旦これを越えなければならない。今日は取り敢えず両氷河が観察し易い右寄りのルートを選ぶ。BCから20分程でモレーンの登りに入る。砂礫と岩の入り交じった斜面は上部に行く程に傾斜を増し、きつい登りである。それに崩れ易いので足元が不安で気が抜けない。14時20分にモレーンの高みに到達、本流水河の全貌が一望される。氷河の舌端は未だ少し奥まった所に有り、そこで氷壁となって落ち込んだ谷は、モレーンと舌端の間に盆地状の平坦な広い窪地を形成している。この窪地の左サイドには暗いエメラルド色の氷河池が見下ろせ、その付近にはキャンプ地に使えるような場所が何ヶ所か有るのが確認出来る。距離を延ばしておきたいならBCはここでも良いかも知れない。左に延びるモレーンの高みは一旦高度を下げて氷河からの流れを下流へ放出し、その後上流に向かって弧を描いて再び盛り上がる。そして右岸尾根の山裾に突き当たる手前で上流へ向きを変え、山裾との間に浅い溝を作りながら氷河の奥へと小さくうねり、最後に大きく迫り上がって、氷河舌端を真横に見る辺りからは一気に傾斜を強めた痩せ尾根状になっている。その高みは下の氷河面とはかなりの高度差が有り、氷河に出るにはきついアルバイトの感もするが、登るルートとしてはしっかりしているよう（この時は冠雪していて、そこが大岩・小岩の堆積した急峻なガレ場とは見えなかった）だし、他に考えられる氷河の舌端から氷河上へ出るルートよりも攻め易いように見えたので、次の本格的な偵察の時には、このルートからと一応二人の間では話が纏まった。

次は右手、左岸側の観察。BC予定地に着いて先ず目に付いた支氷河はどうだろうか。氷河末端の懸垂部分を攀じ切れれば、後は緩やかな斜面から広いプラトーに出て、その後も北西稜に出易そうな比較的楽なルートに見える。問題は如何に懸垂氷壁の上の緩斜面へ攀じ上がるかだが、弱点と

▼BCとエンド・モレーン(正面ナス氷河、右に支氷河)



見えた左サイドの懸垂氷河と岩壁との間の凹角部分は右岸壁をなす手前の岩尾根の向こう側なので観察出来ない。支氷河の右岸に大きくそそり立つ岩峰から一気に下り落ちたこの岩尾根はゴジラの背のように尖った小岩峰を連ね、その間に夫々クレットを作っている。これが氷河の緩斜面の途中に出ているのがBC予定地からも観察され、ルート候補の一つと考えていた。しかしモレーンの上から見る限り、どのクレットも厳しい登攀を求められそうな岩場である。それより第一にクレットに取り付くまでの斜面が悪過ぎて、荷上げを考えると難ルートのようなのである。

一応の軽い観察を終えて一服気分できると急に風が吹き出し寒さが募り出したので今日はこのくらいにして隊長の待つBC予定地に下る。僅か2時間足らずの予備偵察だったが、それなりの成果は有ったように思う。BC予定地を15時に出発してグンには16時50分帰着。(記：樋上)

■BCへ移動

20日 7時起床。真っ暗である。星空が美しい。8時気温-1℃。ポーターは8人。9時に一足先に登り始める。ヤクがのんびりと枯れ草を食むのを横目で見ながら登っているともうポーターに追い付かれてしまった。一服しながらジーロン川を挟んだ対岸に聳える山の名前をポーターに聞く。こんな時にヒマラヤにいることを実感する。

川が右に曲がる手前にヤクの一大放牧地があるが、ポーターと連絡官はその放牧地を過ぎて丘の反対側を進んで行く。道を間違われては大変なので後を追うと彼らは一服していた。必死に急ぐが、

着いた時にはコーナーを曲がっているところであつたが我々のBC地の河原方向だったので一安心する。偶然にもこの道はカバンを一望できる所であつた。1時過ぎBC設営。(記：山森)

■北西稜付近を偵察

21日、晴れ。

今日の偵察任務はBC横から本流左岸の稜線に出て、カバン峰北西稜の途中に続くこの稜線を辿りそのルートの可能性を探る事。

8時に起床。朝食後、ザイルとツェルト、それにEPIヘッドにガスカートリッジの他、行動食などの軽装備で9時45分に最初のルート偵察へと出発。メンバーは樋上、太田の二隊員に連絡官の開村の三人。交信は11時から2時間おきの指令。隊員二人はプラブーツで雪面に出た時の用心にアイゼンとスパッツも携行するが、登山靴の無い開村はそれまで履いていた軽シューズのままである。BCを出て河原を真横に横切り、目標にしていた大岩のそばから左岸山腹に取り付く。傾斜の緩い所を選びながら上流方向へ山腹を斜上し、尾根上に台地状の岩塊をなす高みの左手に落ち込んだコルを目指す。最初はヤクが餌場にしている位の草の多い斜面で攀じ易いが、次第に草の数も少なくなり滑り易い砂礫の斜面に変わって行く。途中の緩斜面で最初の小休止。快晴で風も無く暖かい。再出発後、真上に攀じては横へのトラバースを数度繰り返す。真上への登りも苦しいがトラバースは急傾斜の山腹に出来た溝状のガレ場で、広い幅で上から下の河原まで一直線にガレ石が堆積しているだけに足元で落石を起せば引き摺り込まれて



▲BCとポーター達(奥は開村連絡官)

▼北西稜とのジャンクション(6,231m)付近を見る

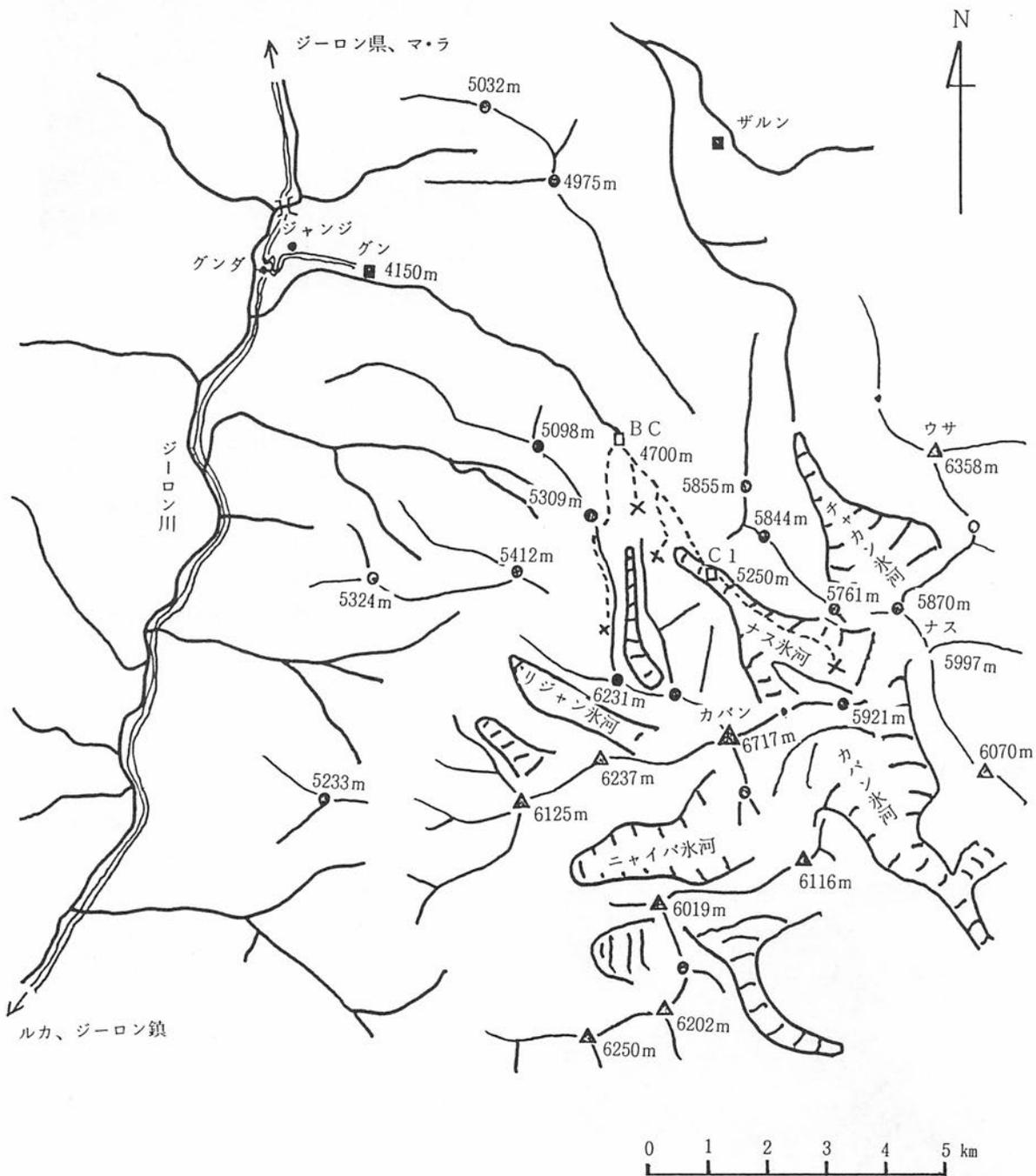


しまいかねなく気が許せない。ここを荷上げするとなると少し厄介な気がする。

12時半に漸くコルに到着。高度は5,260m。思った通り、左岸支流氷河の左岸尾根と繋がっている。ここからは我々の入った谷の一つ南に喰い込む谷を右下に見ながらの幅広く比較的なだらかな斜面の尾根を登って行く。これを登り切ると、そこは下から見た時、左岸支流氷河の左岸側に屏風のように切り立ち、荒々しい諸肌を見せる岩壁の上で尖り波立ち続いていた岩尾根の高みの一つで、下を覗くと左岸支流氷河を真下に見下ろすような感じ。

この高みから山腹を右に廻り込むような形で次の高みへの登りである。思ったよりもきつい登りで二人にははとんと離される。高所順応はここ数年に比べて順調だったし、出発の日から禁煙して来たのに年から来る疲労には勝てないものだと痛感させられる。

次のこの高みに立つと、これから我々が進もうとしているルートの全貌が見渡せた。高度は5,600mくらいとの事。ここからは右手の山腹を辿れなくもないが左下の切れ落ちた細尾根を進む事になり、先行する二人は既にそのルートを攀じている。その後一旦僅かに下って登りになると漸く雪面に入る様子。ところがその後のピークへの尾根と繋がる手前が岩の剥き出したままの細尾根でしかもかなりの急傾斜であるのが見て取れる。ここで丁度15時になり、定時交信時間である。先行する二人に腕で×印を作って偵察中止の合図を送った。それはこのルートではタクティクスを組むのが非常に困難だと思ったからである。理由は第一に、



カバン峰周辺概念図

破線が今回の偵察ルート

作図：太田

1998.11.20

コルに出るまでの山腹の斜面を荷上げするのに結構手間が掛かりそうな事。第二に、ここまで水の取れるC1適地が無いし、未々雪面に出るまで時間が掛かり時間的な無理が有りそうな事。第三に、最後の岩場の登攀が難しく特別なメンバーで無いとかなり困難に思われたからである。しかもそれをクリアしたとしても、その後のピークまでの尾根が非常に長い事も難点に思われた。しかし隊長との交信の結果、二人には先の偵察を後一時間して貰い、疲れていた私はその間その場で二人の帰りを待つことになる。(記：樋上)

開村と太田は、脆い岩のヤセ尾根を慎重に進む。前方には北西稜とのジャンクション部分の岩場が立ちはだかっている。双眼鏡で観察するが、登路となりそうな所は見つからない。一方、左下に見下ろす支氷河からは北西稜上の6,500m余のスノーピークまで雪面が続き、左側の岩との境界付近を辿って登れそうである。そして、その氷河には、右岸の岩峰群の間のギャップを通して入れそうに見える。

タイムリミットの16時になり、5,800m辺りから引き返す。下りは速く、樋上さんと合流後、17時半頃BC着。22日休養。(記：太田)

■ナス氷河の偵察

23日、晴れ。

今日の任務は氷河末端のモレーンを越えてナス



▲岩峰とスノー・ピーク(約6,500m)

▼スノー・ピーク(約6,500m)と支氷河上部



氷河に出、氷河上にC1適地を見つけ、そこにテントを張って帰る事と、そこまでの間の候補ルートの地形状況を探る事である。

9時過ぎに山森隊長の見送りを受けてBCを出発。プラブーツを持たず一昨日の偵察では靴に入った小石で足先を傷付けた開村連絡官は昨夜朝にグンに下山したので今日からは樋上と太田の二人での偵察行。二人の荷物はテントやフィックスロープなどでずっしりと重く、出発の時からザックが肩に喰い込む。

河原を真っ直ぐに上流に向かい、19日の偵察の時とはルートを変えて突き当たった幅広いモレーンの中央付近から登り始める。先に決めた左サイドのモレーンを辿り登る為である。傾斜が強まるとペースダウンで今日も太田隊員に引き離される。漸くモレーンの高みに辿り着くと太田隊員の姿は左に続く高みの何処にも見えない。暫く辺りを見回す内に彼の姿を下の窪地に発見。どうやら窪地の様子を偵察に降りたようだ。再び大きく登り返すのが大変だが後に続いて下って見る。成程良いテント場であるのが分かる。

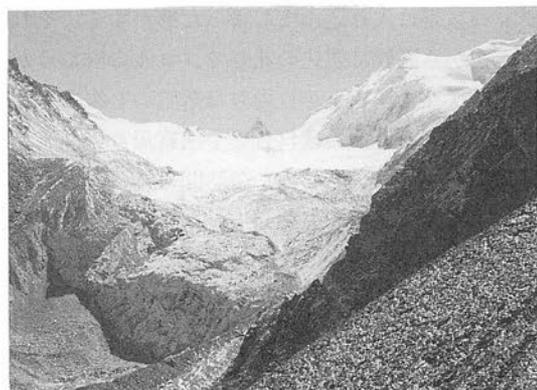
この窪地の氷河池のそばから左サイドのモレーンへ登り返す。荷物が重く苦しくて顎が出る。やっとモレーンの高みに出た時には太田隊員は早くも最後の急峻な登りの途中まで達している。やがて私もその急峻な登りへと入る。19日の偵察で遠望して感じたものとは全く違う岩の堆積した急斜面で、今回最高に辛い登りになり、途中何度一息入れた事だろう。その間も周りの様子を偵察する余裕など殆ど無い。途中のBC定時交信時に高みを越えた太田隊員から高みの氷河への下り口に赤旗

を立てケルンを積んであるとの連絡を受けるが登り着いた高み付近には見当たらず、その場から氷河目がけてガレ場の斜面をずり落ちる。途中で見れば太田隊員は既にかなり上流の氷河の端に達して待機している。そこへは斜面をトラバースして辿り着く。そこには氷河との間に2 m程の幅で浅いが長いクレバス(?)が有り、氷河上へは僅かな距離だがアイゼンを付け、クレバスの中の岩に乗って越えねばならなかった。

越え上がった氷河上は小さな盛り上がりばかりのセラック帯の端で、渡ったクレバスのすぐ脇で気になったが、程好い平坦地だったのでC1にする事にして急いでテントを張り終える。氷面は固過ぎて持ち上がったスノーバーが役立たずアイスハーケンでテントを固定する。

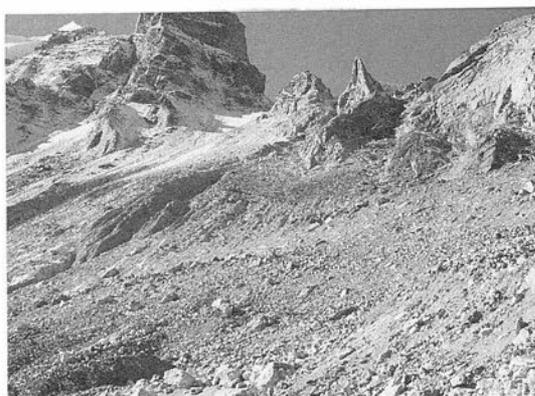
暫くの休息の後でデポするものをテントの中に放り込んで下山とする。帰りは荷物の軽くなっただけモレーンへの登りは楽であるが、きつい事には変わらない。登りの途中で太田隊員の立てた赤旗がモレーンの山腹際の少し低くなったコル状の所に有るのが目に入る。私が登り着いたのは氷河に近い一番高い地点だから随分離れていて見えないのは当然だろう。

モレーンの下りに入り、登りで氷河池から登り着いた地点からモレーン上を辿らず、モレーンと山腹との間に出来た溝状の斜面を下る。この斜面は傾斜も緩く草地状なので下り易い。上部は太田隊員が赤旗を立てた地点へと繋がっているが、ガレが酷いので直接には無理で急峻な斜面にルートを求めなければならない。しかしここから下部は最後に元のモレーンの下部と一緒にあって、



▲ナス氷河舌端とコルの向側の岩峰

▼岩峰とその下のガレ (支氷河への入口)



距離の長い難点を除けば重い荷を担いでの登り降には最適なようにも思われる。

BCには18時過ぎに帰着して今日の任務を終える。

24日、晴れ。

今日の任務はC1に到着後、ナス氷河をコルまで登って、その間の地形と東稜の様子を偵察し、C1に戻ってステイする事。

9時過ぎにBCを出発。未だ陽は当たっていないが雲一つなく今日も天気は良さそう。今日はC1ステイなのでシュラフなどの個装や食料、それにフィックスロープも追加したので一昨日同様ザックが重い。帰りの荷下げが相当な量になりそうなのが今から気掛かりである。

今日もモレーンへの登りは昨日下午の草付きの窪地には入らず、きつい斜面を登るルート。しかしモレーンの高みに登り着いた後は下の窪地に降りず、そのままモレーン上の高み上を辿り、赤旗の立つ地点を経由して12時半、氷河上のC1へと到着。昨日よりも時間的には早く着けたようだが、太田隊員にはとても追い付けない体力が情けない。十歳近く年が違えば、こんなものかと自分を納得させるしかないようだ。

幾らか心配していた右岸からの落石やクレバスの割れも無くテント場は無傷である。

暫くの休憩の後、不必要なものをテントにしまって氷河上部の偵察準備。

13時過ぎ、C1をアンザイレンして出発。氷河の中央に出るようにセラック帯の間を斜めに上昇する。セラックは背丈以上のものは数える程しかない低いものばかりで尖ってもおらず、丁度砂漠

の盛り上がった砂のマウンドが続いている感じ。それにクレバスも全く見られず、傾斜も強くないので歩き易い。しかし、太田隊員のペースを追うのは結構きつく、調子が出るまで何度もストップしてしまう。

程なくセラック帯を抜けて氷河の中央付近を進み出す。右手にピーク直下の垂壁からのものらしい雪崩によるデブリが氷河上に散乱しているのが見受けられ、余り左岸側にルートを取り過ぎると危なそう。

氷河中央部は暫くの間は傾斜も緩いまま積雪も少なく歩き易いのでペースが上がる。しかしそれも右手から落ちる支氷河の出合いを真横にする辺りから傾斜が強まると同時に積雪も増え出し、ラッセルが始まってペースダウン。トップの太田隊員が赤旗ポールを見失わない間隔で立てながら必死に頑張っているが、コルは思ったよりも奥まった所に有らしく、姿を中々現わさない。右手からの支氷河は本氷河よりも傾斜が強いと言っても特別な技術を必要とするもので無く、登頂ルートに考えている東稜途中の6,000m付近に突き上げていて、コルへ出て下から東稜を詰め上がるよりも遥かにピークへは近い。しかも稜線に出た付近一帯が広いプラトーのようになっているのでキャンプサイトにも適している候補ルートの一番手に上げているもの。ただ難点は雪面に何ヶ所も縦横に走る裂け目が観察され、このクレバスを通過が出来るかが気に掛かる。時間が有れば取り付いて偵察する計画だが、今日は取り敢えずコルまでの偵察に徹して進む。やがて目指すコルと繋がっている右岸の岩峰の連なる尾根から



▲ナス氷河上のC 1 (5,250m)

▼東稜の肩とナス氷河



下って来る稜線が確認出来る地点まで来ると氷河正面の向こうに雪をも寄せ付けず、先端を鋭い槍先の如く天に向かって突き上げた尖峰が顔を出し、続いて左手に丸いドーム状のピークが見えて来る。このピークが出来れば登る予定のナス峰(5,997m)で、尖峰はナス峰から南に延びる尾根上の岩峰だと思われる。それならコルは後僅かに迫っている筈で、後少し登れば広い平坦地が現われるような感じがする。この辺りでコルは右に寄っている感じがするので少し右寄りにルートを取るが、突然トップの太田隊員が立ち止まってしまった。何か有ったのかと近づくとヒドンクレバスに足を踏み込んだらしい。右手には大きな落ち込みが有り、大きなクレバスが口を広げて待ち構えているらしい。これは危ないとして私が左上方に向きを変えて登って見たら幾らも行かない内に足元の雪が消えて同じくクレバスの中へ足を踏み入れ掛けた。見れば細い溝なのだが、中を覗き込んだら何とも深そうである。周りを観察すると他にもヒドンクレバスが有りそうな地形である。どうやらヒドンクレバス帯に入り込んでしまった感じがする。それに先程から天候は悪化の兆しで、コルの向こうから雲が次々と湧き上がり周りは薄暗いし視界も悪くなっている。ここ数日BCや偵察帰りの高所から見ていると、夕方前のこの時間帯になるとピークからコルにかけて雲が発生し易い状態のようで、この付近はこの時期になると言う気象状態なのかも知れない。この時は降らなかったが、先程からラッセルを強いられている積雪は数日來のこの雲がもたらした新雪に違いなさそうである。こんな気象状態と暗さでは雪面の観察も十分出来な

い恐れが有る。偵察に来て事故を起したのでは話にならないし、一応コルまではルート間違わなければ時間的にも十分到達出来ると確信が持てたので今日の偵察は打ち切りとする。

下山は私がトップとなる。下りは流石に早い。皮肉な事に、下る程に陽が差して来て明るさも戻る。それでも振り返るコル付近は雲が湧き続けているようだ。

C1には19時前に帰着。今回最初で最後の氷河上のステイである。

25日、今日も晴れ。コルから上部を除き、全く安定した天気が続いている。偵察を終えてラサへ帰るまでこのままでと願う。

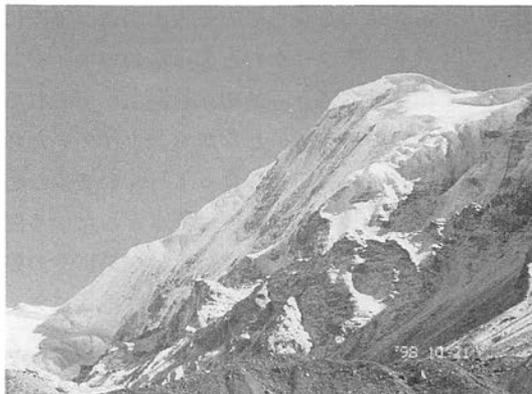
昨晩は音は小さいが氷河のギリギリ、キュッキュなど独特の甲高く軋む音とガラガラと響く右岸からの落石音が地に付けた頭に響いて中々熟睡出来なかった。特に氷河の立てる音は何時聞いても気持ちの良いものではなく、今回はテント場が大きなクレバスのすぐ横だという事も有って尚更であった。C1はもう少し氷河の方へ入った所の方が良いかも知れない。

さて、今日はBCへ下る日で、昨夜の交信で何時もより遅めの起床でも良いとの許可が有り、寝



▲上流から見た北稜

▼BCから見た北稜（中央）



不足もご破算の感じ。朝食を済ませてテント場の撤収にかかる。しかし二日間で担ぎ上げた荷物を一度に降ろすと言うのは矢張り負担が多過ぎる。その事を定時無線交信で山森隊長に伝え、テイクインテイクアウトの方針に反する事にはなるが、来年の本登山の時まで何とか残っているような方法でフィックスロープ数本などをデポする許可を得る。

デポ品をビニール袋に詰め、それを氷河を渡り返した高台の平坦地に置き、その上に小岩をビニール袋が隠れるまでに積み上げてから下山開始。今日はモレーンの山腹をトラバース気味に上昇、例の急峻な斜面に登り着く高みへと向かい、その急斜面を下り降りる。何れにルートを取ってもモレーン上のルートは、この斜面を避ける事は出来そうもない。この斜面を下り降りた所から再び窪地に降りて氷河からの水流沿いに降りるルートを選ぶ。

窪地に降りての休憩時に太田隊員から提案が有り、今日はBCへ下るだけで時間も有るので氷河舌端真下まで近づいて舌端から氷河上へのルートや支氷河へ抜け上がる為のキレットの通過が可能か等を詳しく偵察する事になる。荷物はその場に置いて空身で出掛ける。太田隊員は用心の為にアイゼンだけは持って行く。降り着いた地点は氷河池を真横上に見る流れそばで、舌端まで100m程だろう。

氷河舌端まで近づくと、水の流れ落ちる舌端右サイドは割り合いに傾斜の強くないガレ場状で、これなら氷河の上には攀じ抜けられそうな事が分る。一方、支氷河へ出る為の岩峰間に出来たキレットの方は思ったよりも悪いし、そこへ辿り着く為

の下部の斜面も荷上げするには厳しすぎる事が再確認出来る。余力を残している太田隊員が実際に登ってルートを確認したいとの事なのでアイゼンを持って出掛けて貰う。最初、氷河上へ出られるかを偵察するのかと待機しながら見上げていたら、キレットの方への急斜面を登って行くので少し心配になる。しかし身の軽い彼は飄々とした後ろ姿を見せながらどんどん登って行き、次第にその姿を小さくする。やがて下から見ると台地状に見える所に登り着くが、暫くしたらその向こうに消えてしまい、次に氷河寄りの地点に姿を現わすまでの時間の長かった事。定時無線連絡で山森隊長から無線を持たせなかった事を指摘されて後悔する事頻りであった。(記：樋上)

ナス氷河舌端の左岸側から、支氷河との間の岩峰下のガレ場を登る。遠くから見た程の傾斜はないが、足場が不安定な上、真新しい落石の痕跡が至る所に見られ、ここから岩峰の間を抜けて支氷河へ出るのは、ルートとして不適當であることを確認する。

また、ナス氷河上も、舌端近くの左岸寄りには大量の落石が転がっており、舌端の左岸側を登るルートをとる場合、氷河上に出たら早目に左岸から離れたほうが良さそうである。

樋上さんの待つ所まで下って、15時の交信後、

▼左岸尾根からチャマルとマナスル(右奥)



▼グンの住民たち



水流沿いに下り、16時過ぎBC着。あと2～3日欲しいところだが、明朝はもうBC撤収である。

(記：太田)

ヤンラ・カンリ(7,429m)北面を探る

26日 午前零時小用に起きると雪がチラついてきた。しかし4時には星空だった。7時-6℃。河原を染める程度の降雪だった。既に雪も止んで9時20分連絡官とポーターがBCに到着した。未だ陽が当たらない。石積みの焼却炉でゴミを燃やしている間に撤収が終わった。9時55分河原からポーターが使う道を通って下山する。

グンには別れを惜しむかのように村人たちが2台のジープの廻りを取り巻いていた。運転手たちに迎えられ村人に見送られて、正午過ぎに短かったグンに別れを告げた。

ジーロン川沿いにつけられた道を南に下って行くと、川は清流となり木々が多くなり色づいている。先程までの茶褐色の世界が嘘のように赤や黄

の世界が眼前に広がっている。2時間走って目的地のルカに着いた。3,100m空気が美味しい。木材飯場がありその前の畑に2張りのテントを張ってBCとする。小雨がパラついた。(記：山森)

27日、晴れ。

今日の任務はジーロン川支流のラマプーの左岸奥にあるショイボガヤルマの集落に通じる道を辿り抜けてルートを探りながら上流に遡り、ヤンラ・カンリ北面へ突き上げる怕屋氷河末端へ出て、その周辺を偵察する事と、そこまでのルート状況及び右岸側に可能な登攀ルートが有るかどうかの調査である。

未だ陽の当たらぬ9時に幕営場を出発。ラマプー奥の集落までは太田隊員が昨日偵察済で山道を通

じているとの事。幕営地から真っ直ぐジーロン川の流れへの道を下り、架け直されて間のない感じの手摺も付いた太い丸木を渡した橋を渡って対岸へ。道は登りに掛かるとすぐに二つに分れ、昨日偵察した太田隊員は右への道を辿って集落へと向かったが、左の道も同じと思うのでと左への道を選ぶ。登り切ると一寸した広地に出て再び分岐。左へ平坦に進むのは、幕営地からも対岸に広い平坦地が見えていたマガの集落へ続くものようで、我々は右上する道を辿り行く。すぐに草原状の平坦地が続くようになり、その中に交錯する微かな踏跡を探しながら進んで行く。ラマプーの流れは少し離れた所に有るのが分かるが、ここは流れよりもかなりの高台である。牛等の家畜の放牧地になっているらしく糞がやたらと多い。農作物を作る場所なのか石積みの囲いも何ヶ所かに見られる。時々車の通れる地形も出て来るが、このルートは道と言うよりも住人が放牧や農作業で通う内に出来たものように思える。程なく前方に集落が見えて来たので一旦集落に入って見る。この集落へ通ずる踏み跡が見当たらず暫く辺りをウロウロするアルバイト。

集落に入ると、とある一軒から老婆が出て来たのに出会い、挨拶序でに太田隊員が上部の様子を中国語に身振り手振りを加えて尋ねて見た。正確には理解出来なかったが、集落の奥にはゴンパが有って、道はそちらへ向かって上流へと続いているらしい。五体投地の仕草を見せる所を見ると巡礼者が時々訪れるのかも知れない。老婆にお礼を言って別れ、数える程しか無い家並みを抜けて再び草地へと入る。道は集落までとは違い明瞭で、



▲テントに集まるルカの住民

▼ルカBCの木材飯場小屋



老婆の話は間違いなさそう。流れからは更に離れ、右手に続く尾根下の岩壁を次第に近づけながらのピクニック。緩やかな草原の中の登り道で、集落から離れて建つ民家らしきものも時々現われる。

これが終わると樹林帯に入る。樹林の中に入っても道は安定したものでプロムナードの趣を漂わせ、時々樹間を透かして見えるヒマラヤ独特の山並みと三千数百メートルの高度から来る息切れが治まっている時は、ここがチベットの奥地、もしかしたら日本人では初めてここに踏み行ったかも知れない未知の場所だと言う現実を忘れ、丸で日本の長閑な山間を散歩しているかの錯覚させ覚える。樹木や草も日本に生えているものに良く似たものが多く杉、ダケカンバなどは同じとしか思えないし、中にはイヌザンショウと思われるものも目に付く。時々見かける茸類も日本のものと似ていて、サルノコシカケやホコリタケなどは全く変わりにない。

やがて樹林帯が終わって視界の開けた所に飛び出す。プヨンからヤンラ・カンリにかけての稜線が素晴らしい白いスカイラインを眼前に現わし感激だ。右側に続いている岩壁が途切れて、その間が急峻な谷になり、奥に岩峰が先を尖らせてそそり立つ。良く見ると谷の途中の岩場に建物が見える。民家としては不便な所に建てられているから、これが老婆の伝えて呉れたゴンパなのかも知れない。カメラをズームアップして人影を探すが、その気配は感じられない。ここまで約2時間、丁度定時交信の時間である。

交信を終えて前進を再開。すぐの流れに架かる橋を渡ると林が現われ、進む程に次第に樹影が濃

くなり、何時か再び樹林帯の中を歩む。この樹林帯と草原とのコントラストが何とも言えない気持ちよさを醸し出しているように思える。ゴンパまでの道かと思っていたのが、未々奥まで続いているのが有り難い。

この樹林帯を突き切ると広い草原状の平坦地に飛び出る。一瞬、ここまでの道がここで放牧する為のものなのだと早とちりするが、その広地に足を一步踏み入れて、それが違っていると分る。何とそこは全くの湿地帯で、小流れも至る所に走っているのではないか。それでも人が入っているらしく、それまでのはっきりした道型は無いが、水溜まりを避けるように微かな踏み跡が続き、流れが出て来る所には丸木が渡してあったりして途中まで何とか進む。しかし程なく踏み跡を見失い、巴む無く前方を覆う次の樹林帯の中央へと強行突破して湿地帯を抜け出る。

樹林帯に入って道の続きを求めながら直進して見たが一向に見つけられない。酷い藪漕ぎと言う程でもないが森の中での彷徨が暫く続く。灌木が少なく蜘蛛の巣も張っていないのが有り難い。それでも笹等も結構有って地形も凹凸だから進み辛い。途中で直進するのを止めて本流の方へと向って見る。30分ほど彷徨っただろうか、疲れも出たので程好い場所を見つけて森の中でのティータイム。ザックを降ろして大木に背を持たれ掛けて座り込み、何気なく目の前を見る。するとどうだろう、その座り込んだ足元の先に道が有るではないか。周りを見て休憩場所を選んだのに分らなかったとは二人で顔を合せて苦笑いする事頻りである。それでも湿地帯を本流寄りに横切ればこの道



▲草原上の湿地帯

▼ショイボガの樹林帯の道



に出られる筈で、道は更に続いていた事が確認出来たのは何より。

再び樹林の前進を再開。傾斜は緩く、荷物も軽いのに次第に疲れが酷くなる。矢張り3,000m以上の高地を歩き続ければ仕方ない事か。程なく登りが終わって緩やかな下りに掛かると視界が大きく開けランブー・カンリから下って来る川幅が100mも有りそうな支流の広い河原に出る。ここで道が不明瞭になって何処を渡っているのか良く分らない。しかしケルンが何ヶ所かに積んであって河原を上流へ向かって横切っているのが何とか読み取れる。支流と言っても小さな流れが離れた位置で二本出て来るだけである。この河原の中央付近で小休止。交信時間が来るのを待ってBCへ定时无線連絡を入れる。

交信が終わった出発に際し、太田隊員も私の疲れが分るようで気遣って貰った。ここまで来たのだから頑張らねばと気合いを入れる。

河原を渡り切ると岩壁の下に出た。踏み跡は、この岩壁に沿って左方向へと入っている。本流に近づく感じである。しかし幾らも進まない内に刈り払われた小広場に出た所で終わってしまう。そこは作業場の様で、大きな木板が数枚岩壁に立て掛けられている。大木から取って乾燥させているらしい。右手の大きな窟には焚火の跡が残っているし、広場の奥には椅子ともベッドとも思えるようなものも置いてある。

踏み跡の続きを探して見るが何処にも見当たらない。道は、この作業場へ通う為のものかも知れない。ルカからここまでしっかりした道が有り、取り敢えずここまでは荷物は楽に運べる事が確認

出来た。

しかし、ここから氷河までは樹林の中を突き進むしかない。太田隊員が先頭で樹林の中へ入り、私が後に続く。藪を分け、小尾根を越え、小谷を渡っては小尾根に登るを繰り返す。何とも複雑な地形をしていて何処にいるのかも定かでない。やがて少し大きな尾根に登り着くと、尾根上には溝とも言える道型が続いている。これを上部に向かえば氷河の方へ向かえそうにも思えたが、何となく方角が違うように見え、疲れが酷かった事も手伝って逆に下りに使って一旦本流に出る事を決めてしまった。これは後で失敗だったと分るが、下った溝も僅かで終わってしまい、後は再び藪を掻き分けて本流そばへと下り着く。

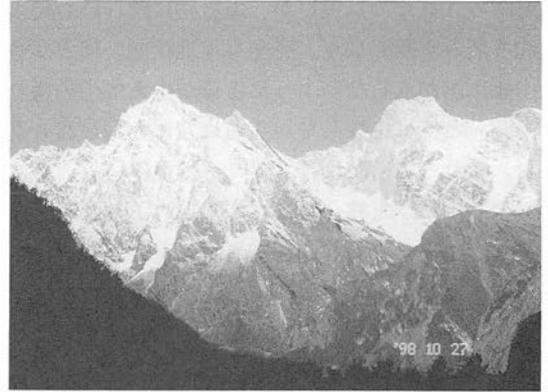
さてこれからどうするかを二人で検討。時間も残り少なくなり、これから氷河末端まで往復するのは太田隊員なら可能だろうが疲れの酷い私にはきつ過ぎる。それで一応ここから帰る事にして貰うが、それならこのまま流れ沿いに下り、下流の偵察をして可能なルートを探ろうと決定。

左岸流れのそばを下って行く。時々岸辺が崩れていて、その時は樹林の中を進む。茨が結構多く、掻き分け憎い。やがて広い河原になった左岸からの谷との出会い。往路に広い河原に出会ったランプー・カンリから下る谷だろう、ランプー・カンリの山群が中央に見える。これを上流へ向かえば山道へと戻れて早い。しかしその河原と出会いの河原の間は樹林帯になっているし、下流の支流の偵察も残されているので、そのまま流れに沿って下り続ける。途中右岸に支流を一本見つけるが、これは小さなもので、目的の支流ではなかった。



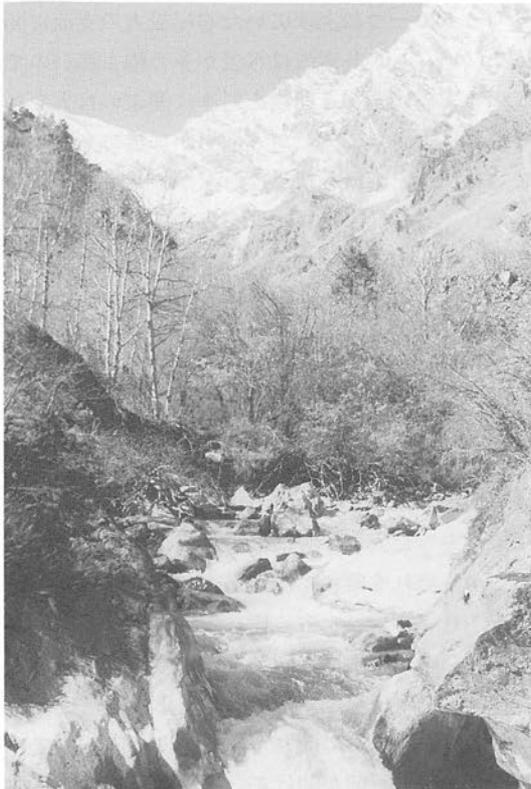
▲ラマ氷河と下の谷

▼ヤンラ・カンリの北側に聳える山々



ここでも太田隊員の足が早く、追うのが苦しい。樹林に入る度に大木が切り倒され、途中の一部だけが持ち去られて残りの殆どが放置されたままの光景が目につき出す。あちこちに人が踏み入っている事もさる事ながら、何故放置されているのか不思議に感じる。そんな矢先であった。流れの方にふと目をやると右岸から白濁した水流が荒れ狂ったように合わさって来るのに気が付く。かなりの水量で、それまで殆ど濁りの無かった本流もそこから下流は完全に白濁してしまっている。偵察するルートの一つに上げていた右岸最大の支流に間違いはない。しかし本流は水量が多く幅も広いので、このままの状態だと荷物を対岸に運ぶのは大変だ。これだけ大きな支流だから何処かに橋でも架かっていないかと下流を暫く探したが、その気配は全く無し。もし対岸にルートを求めるとなれば大木を切り倒して架け渡るか、ラマプーがジーロン川本流と出会う直前に架かる橋を渡って左岸から右岸に渡り、右岸沿いに上流へと進んで、この出会いへ出るルートを探して物資を運ばねばならない。それとても右岸に道が有るかどうかは不明だから、しっかりした偵察をする必要がある。その事は今後の課題に残し、この支流の出会い付近は、往路に道を失った大きな湿地帯の真横に当たるので、ここから流れを離れて湿地帯へ向かい、往路の山道を辿り下る事にする。樹林の中へ分け入り、少し下り気味に山手へと向かう。すぐに幾筋もの小さな流れが縦横に走り出し、渡れる場所を探しながら前進。これらの流れが本流方向へ向かっている。間もなく眼前が開けて、読図通り湿地帯へ飛び出す。後は前方に見える岩壁の近くまで湿地帯

を横切れれば道に出られる。そう思って湿地帯に足を踏み入れたのは良いが、進む程に踏み込む足の沈み込みが酷くなり、完全な沼地状態。何とか登山靴に水が入らないようにと草が生えて土の盛り上がった部分を探しながら右に左にと飛び渡り進む。これとても時にはズボリーと沈み込み、慌てて次の場所へと移らねばならない。こうなると直進など出来る筈もなく、左右真横どころか後退さえもする始末。この湿地帯の中での隊長との交信時には、すぐに道に出られるように伝えていたのに、二人は何時か離れ離れ。漸く私がズボンの裾は泥だらけになりながらも何とか登山靴には水が入らずに道に抜けられたのは交信の時から40分も経過していたし、10分近く遅れて道に辿り出た太田隊員は膝下まで浸かってしまったと、靴下を脱いで水を絞り出す有様。とんだハプニングだったが山道に出さえすればルカの幕営地まで迷う事はない。往路に通過した集落からは左への良い道を辿り、昨日太田隊員が立ち寄った集落を抜けて帰る。ジーロン川の流れに下る手前の広い草原を歩きながら見たランタン・リルの姿が印象的。そ



▲ラマ・プー上流風景

▼草原からプヨン (6,676m) 北面



の向こうはもうネパールなのだ。19時過ぎにテントへ帰着。(記：樋上)

28日、快晴

今日は、太田一人で、昨日到達できなかったヤンラ・カンリ北面の氷河舌端付近までを調査し、時間があれば右岸支流（ヤンラ・カンリ北東面のラマ氷河を水源とする谷）にも入ってみる予定である。

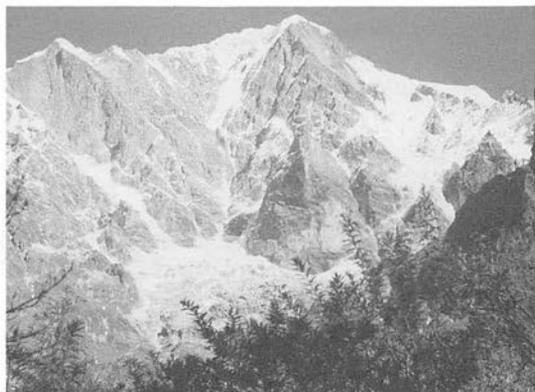
周囲が薄明るくなるのを待って8時にテントを出る。ジョイボガの集落を通過して昨日と同じ山道を進む。細長いチョルテンと思われる石積みが何箇所もあり、小さな木の橋で小川を2回渡る。

9時45分、昨日途中で踏み跡を見失った湿地帯にさしかかる。この付近からはラマ氷河とその下の谷がよく見える。ラマ氷河には舌端という程のものではなく、谷の奥からそのまま氷河上へ入り、左岸側の斜面に登れるように見える。この谷の左上には、ヒマラヤ巒とハングした岩で武装したプヨン (6,676m) が恐ろしい表情を見せている。今日は、泥の露出している部分に残る、人や馬(?)の足跡を注意して追っていくと、足跡は前方の樹林に入る手前で左に大きく向きを変えていて、それを辿ると樹林の中のはっきりした道に導かれた。湿地帯の通過所要時間15分。運動靴程度でも防水がしっかりしていれば、このルートから外れない限り足を濡らす事なく通過できるだろう。

樹林の中の道をしばらく行くと、右手にランプー・カンリ (6,668m) 南面の全貌が見えてくる。正面の壁は頂上直下まで雪をほとんど着けず、なかなかの迫力である。

10時50分、板を作る作業場へのルートを示すケ

▼ランプー・カンリ (6,668m) 南面



ルンの積んである、左岸支流の河原に到着。別の方向への道がないかと付近をしばらく歩き回すが、道は見つからず、磁石で方向を定め、藪の薄い所をつないで進む。

まもなく、小さな谷の中を登るようになると次第に傾斜が増してくる。谷に入ってから100m近く高度が上がったところで左の小尾根に出てみると、数十m下に川の流れが見えた。本流である。この小尾根上からは、ヤンラ・カンリ東稜6,715m地点から北へ下る岩稜と、同じ地点から北東へ下る、下部が幅広の雪の尾根がよく見える。ラマ氷河の谷から、この幅広の尾根に上るのが、登頂ルート第一候補と思われるが、尾根の上部が少し悪いように見える。この尾根と岩稜との間には広い河原を待つ谷があり、そこから岩稜に取り付く事もできそうだが、岩稜の上部の傾斜がきつい。

小尾根上は灌木が密生して歩きにくいので、急斜面を下って川岸に出る。川幅は数メートルだが水量豊富な急流である。水はあまり濁っておらず、いつの間にか目が魚影を捜しているのに気付くが、そんなことをしている場合ではない。飛び石伝いに渡れる所も無く、時々左岸を高巻きながら上流へ向かう。標高3,650m辺りで二俣となり、膝下の徒渉で右俣を渡って左俣の河原に入っていく。地図には左俣の水線が描かれていないが、その理由はまもなく分かった。高さ数十メートルのモレーンの下端から、いきなり川が始まっていた。二俣までの流程が短かすぎるため、地図上では省略されたらしい。

12時50分、モレーンを登り始める。積み重なる岩は不安定で、氷の露出している所もある。最初

▼ヤンラ・カンリ北面 (プヨン寄り)



の高みに立っても前方の視界は開けず、大きなアップダウンが続く。左岸側の少し高い位置には起伏の無い段丘状のモレーンが下流から上流まで続いているのが見え、ずっと下流からその段丘状モレーンに上るべきだった事に気付く。とりあえず、見える範囲で最も高く、見晴らしがききそうな高みを目指すが、そこにたどり着いてみると、前方には小山のようなモレーンがいくつもあって視界をさえぎる。そんなことを何度か繰り返しているうちに時間はどんどん過ぎていった。14時10分、前進をあきらめて最後の写真を撮り、引き返すことにする。結局、氷河の舌端は確認できなかったがヤンラ・カンリ北面全体がよく見えた。正面及びその左手は圧倒的な壁である。右手の北西稜に突き上げる支稜はあるが急峻であり、北西稜の上部も難しそうだ。

モレーンから降りて二俣を過ぎ、今度は小尾根を越えないで川からあまり離れずに下っていく。藪は薄い、岩が積み重なって段差を作り、荷物が重い時は苦勞しそう。途中から左岸支流の方に向かう。15時40分、見覚えのあるケルンの立つ河原に出る。ここからは道がある。テントまで直線距離7km、道のりにして10km弱か。隊長から、明朝撤収予定のため今日は早目に帰るように言われており、もうラマ氷河の谷に入る時間は無いが、1か所、帰りに確認しておきたい場所があった。それは、ショイボガ集落の奥1km位のところからラマ氷河の谷の方向に分岐する山道である。この道がどこに続いているか、少し期待を持って入っていくが、道はまもなく何本かに枝分かれし、どれもすぐに不明瞭になってしまった。しかし、そ

〔マ・ラ (5,234m) からヒマラヤの大パノラマ (上から順に右へ連なっている)〕



▲左端がカバン (6,717m)、右端プヨン (6,676m)、この写真だけ撮影場所が少し異なる



▲左からプヨン、ヤンラ・カンリ (7,429m)、ランプー・カンリ (6,668m)、ガネッシュ・ヒマールⅡ (三角錐の山7,118m)



▲左がタブサール (6,452m) 右の双耳峰がチャマール (7,187m)、右端が6,372m峰



▲左端がチョグラ・リ (6,514m)、中央の三角錐の山がマナスル (8,163m)



▲左からバンバリ・ヒマール、チェオ・ヒマール、ラトナ・チュリ (7,035m)、ダモダール・ヒマール

▼晩秋のジーロン川



の先も藪はあまりひどくなさそうなので、ラマ氷河の谷を目指す場合、下流から川沿いに道が無ければ、このルートを整備するのが効率的と思われる。

元の道に戻り、帰りを急ぐ。あと何日か滞在して、この周辺をくまなく探れたら……などと、叶わぬ事を考えるが、今回はカバン峰偵察の付録のようなものなので、このくらいで我慢しなければならないだろう。17時40分、テント着。

(記：太田)

29日～31日 ルカのBCを真っ暗な8時過ぎに出発しジーロンを経てマ・ラに到着。風は冷たいながらヒマラヤの大景観を一望し一路ティンリへ

▼ヤンラ・カンリ北面 (ランプー・カンリ寄り)



と向かう。この日はシガールの招待所に泊まったが晩秋の梢の向こうに凍れる月が輝いていた。翌日寒々としたチョモランマを見ながらジャツォ・ラを越えてシガツェに戻り、何日か振りに風呂に入った。31日は来年のサマー・キャンプの舞台に予定しているチョム・カンリを見るべく大竹でヤルツェンボ江を北に渡る。道路はよく整備されていて変化する景色も心地よかった。チョム・カンリ、ニェンチェンタンラの雄姿を眺め、ヤンパーチンからラサに戻ったのは17時半過ぎであった。

11月1日 ラサでデポ品の全てのリスト作成。

2日～4日 成都、北京を経て帰国。北京では曾曙生主席ら幹部にカバン偵察報告を行い、ヤンラ・カンリについて口頭にて許可を戴く。また、2月7日に予定されているH A Jの「中国登山研究会」にCMA交流部から代表団を派遣したいとの意向が表明され承諾した。(記：山森)

* 日本ヒマラヤ協会カバン偵察登山隊

* 隊長：山森 欣一 (54) 東京

隊員：樋上 嘉秀 (54) 大阪

隊員：太田 康夫 (45) 広島

連絡官： 開村 (35) チベット登山協会

地域ニュース

《インド》

登山規則一部変更

IMFでは登山規則の見直しを行った結果、次のように変更となった。

①次の4座はトレッキング・ピークとして、連絡官不要、×ビザ不要で12人までUS\$300ー。

ストック・カンリ (6,153m)

ラダッキー (5,345m)

フレンド・シップ (5,289m)

ハヌマン (6,070m)

②登山隊の最少メンバーは2人とする。

③クンの標高を正式に7,135mとする。

《中国》

ラサに登山用品店オープン

このところラサに登山用品店がオープンしている。一つはポタラ宮の広場の一角にある。日本でも馴染みのニマ・ツェリンが経営している。衣服関係が主な商品であるが品数は少いがプラブーツやザックなどもある。

一方、チョカン寺の八角街付近にある店が入ったことはないが前者より小さくて、こちらも衣服やザックが中心のようである。

▶ポタラ宮広場の一角にある登山用品店



トピックス

ポカラ国際山岳博物館へ
日本の山岳関係者が援助

ネパールのポカラに建設中の「国際山岳博物館」については、ネパール側から日本の山岳関係各方面に対して資金協力要請があり、関係6団体で「国際山岳博物館関係団体連絡協議会」を結成し、建設資金総額約4億円の一割の4千万円を目標に募金活動を実施して来ましたが、11月13日に開催された連絡協議会に於て、現在の募金額が2千万円を超えたことが確認されました。そこで、ネパール側の要請もあり、11月下旬に連絡協議会から坂口会長、八木原実行委員長がカトマンズを訪問し、訪ネ中の神崎事務局長らと合流し、当該博物館計画に対するネパール側の実態調査を行い、適切であることが確認された場合、2千万円の資金援助の目録を手渡すこととなりました。尚、募金は3月末まで実施されますので更なる協力を宜しくお願ひします。

H A Jでは、この件に関して機関誌「ヒマラヤ」誌上で2度呼び掛けを行い協力をお願いしましたが、11月6日現在、郵便振替用紙に「日本ヒマラヤ協会」と表示して協力戴いた方は下記のとおりです。有り難う御座いました。

記

[10万円] 昭和印刷(株) [5万円] 平田清志
[3.5万円] 山森欣一 [3万円] 尾形好雄
江藤公 田辺治 [2万円] 日向野恵美子 寺沢善信・玲子 酒井國光 岩崎洋 [1万円] 岡部純一 吉賀信市 吉井敏英 五月女隆 渡部清治 森山安次 中岡久 北條治男 柳穰 今村裕隆 稲葉英夫 野沢井歩 宮崎久夫 生玉道雄 西本武志 山崎幸二 飛田和夫 森保仁 伊藤清春
[5千円] 高橋堅 菅原聡 中山健 梅澤佳子 石川真知子 沖允人 仕名野完治 沢田幸子 坂上利明 鳥井修一 三笠喜美夫 小川貞夫
[3千円] 坂上真知子 七宮勝広
[2千円] 大澤清 以上45名 613,000円

第20回 インド・ヒマラヤ会議開催

恒例のインド・ヒマラヤ会議も20回を迎えることになり下記のとおり開催されます。

記

1. 日時：1月31日(日) 9時～17時
2. 場所：豊島区民センター
3. 参加費：3,000円(資料代含む)
4. 内容：最新情報、98年登山隊報告、情報交換

BOOKS

チェオヒマール登山隊1991

伊万里山岳会がネパール警察と合同で初登頂に成功した登山報告書。落石に悩まされながらも日本・ネパール各一名とHP2名が初登頂。入山者の少ない地域の貴重な資料である。

B5判 68頁(内カラー12頁) 1998年5月刊
〒848-0041 伊万里市新天地475-45 岡崎正伸

中年のための登山医学

日本山岳会、日本登山医学研究会で要職を務められ、厚木病院院長として活躍されている大森薫雄ドクターの著書。第四章として「海外の山も夢じゃない」があり、その中で「高山病」、「凍傷」、「トレッキングの心得」について解説があるのでヒマラヤへ行く人にも貴重な参考書である。

B6判 243頁 1998年11月17日刊
東京書籍 1500円+税

東京集会のお知らせ

日時 12月21日(月) 午後7時～
内容 望年会です
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN

岳人

毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

99年	特集
★ 1月号	雪の槍ヶ岳・穂高連峰・笠ヶ岳に登る再発見・八ヶ岳 森の逍遥から氷瀑まで 魅惑の雪稜、滑降三昧の後立山連峰 残雪の上越国境、奥利根源流を訪ねて 新緑の頸城・戸隠 北の山、南の山 南アルプス、鋸岳から光岳、深南部へ 花、尾根、沢の東北の盟主・朝日と飯豊 幽遠の黒部溪谷、岩壁、源流、高原へ 森と尾根と谷、紀伊半島の大峰・台高 南会津と奥美濃、山里の魅力も探る 秋深い奥秩父と西上州 その山と人 岩と雪の殿堂・剣岳と立山連峰へ
2月号	
★ 3月号	
4月号	
★ 5月号	
6月号	
★ 7月号	
8月号	
9月号	
★ 10月号	
11月号	
12月号	

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局(中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
東京本社 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

ヒマラヤ登山遭難事故

ネパール・ヒマラヤ編 (2)

1987
↓
1997

(対象は標高6,000m以上の山、遭難者の〔 〕内は、シェルパなど現地雇用者) ↓は登頂後遭難

No.	遭難日	山名	標高	人数	所属	遭難者名	遭難場所	原因
205	87, 1,30	サガルマータ	8,848	1	韓	〔ツティン・ドルジェ(21)〕	7,700m	転落
206	87, 3,13	メラ・ピーク	6,473	1	日	金森竜一郎(22)	4,300m	雪崩
207	87, 5,24	アンナプルナ I	8,091	1	スペイン	アンドレス・フェレル(29)	C 1 上	転落
208	87, 9,15	ローツェ	8,516	1	ポーランド	チェスワフ・ヤキェル	6,200m	雪崩
209	87, 9,27	ローツェ・シャル	8,400	4	スペイン	A.S.フェレル(48) S.エスカレラ(33) A.キニョネス(27) F.ポラス(30)	7,450m上	雪崩
210	87,10,14	クンバカルナ	7,710	2	オランダ	R.D.コーニング(37) ゲール・フリーレ(36)	6,100m	落水
211	87,10,中	マカルー II	7,678	1	仏	ジャック・サンマルタン(19)	B C 下	疲労凍死
212		〃		2		〔HP 2名〕		行方不明
213	87,10,19	イムジャ・ツェ	6,160	4	英	R.ショルテンズ(f) G.L.ソービー 〔スクマレ・タマン、ゴルバ・タマン〕	B C	雪崩
214	87,10,28	マナスル	8,163	1	日	工藤一義(43)	B C	高山病
215	87,12,上	カンチェンジュンガ	8,586	1	韓	リ・スンホ	B C	高山病
216	87,12,10	カンチェンジュンガ	8,586	1	韓	〔HP 1名〕		高山病
217	87,12,20	アンナプルナ I	8,091	2	日	小林俊之(22) 斎藤安平(34)	C 4 上	転落
218	88, 4, 9	アマ・ダブルム	6,812	1	カナダ	チャールズ・エッケンフェルダ(34)	6,060m	転落
219	88, 4,11	チューレン・ヒマール	7,371	1	韓	クォン・デーシク	6,300m	転落
220	88, 4,18	プモ・リ	7,161	1	米	クリス・ライバンドグット(27)		↓ 行方不明
221	88, 4,21	サガルマータ	8,848	1	日	水腰英隆(48)	B C 5,500m	高山病
222	88, 5,21	カンチェンジュンガ	8,586	1	印	サンジェイ・ボロレ(28)	C 3	高山病
223	88, 9,21	サガルマータ	8,848	1	ネパール	ナラヤン・シュレスト(28)	7,200m	雪崩
224	88, 9,29	アンナプルナ I	8,091	2	日	森明彦(43) 〔アン・ダワ〕	5,000m	雪崩
225	88,10, 1	サガルマータ	8,848	2	仏	〔ラクバ・ソナ、バサン・テンバ〕	8,200m	↓ 疲労凍死
226	88,10,14	アンナプルナ I	8,091	1	チェコ	イジ・ペリカーン(36)	7,600m	転落
227	88,10,14	マカルー	8,463	1	ポーランド	リシャルド・コワコフスキ(34)	頂上直下	転落
228	88,10,17	アンナプルナ I	8,091	1	エクア	ラミロ・ナバレタ(38)	R. N 稜線	転落
229	88,10,17	ギャチン・カン	7,952	1	日	馬場信一(27)	C 4 上	転落
230	88,10,18	ティリットォ・ピーク	7,134	2	チェコ	ベトル・グリベク(45) レオ・ホルカ(44)	頂上下	転落 ↓
231	88,10,18	プモ・リ	7,161	2	アイス	ボルスティン・グジョンソン(27) クリスティン・ルナルソン(27)	6,400m	転落
232	88,10,18	サガルマータ	8,848	4	チェコ	D.ベチク(34) P.ボジク. J.ユスト(33) J.ヤシコ	南東稜8,300m	転落
233	88,10,21	シャルツェ	7,459	1	仏	エリック・ブルデ(26)	6,000m	雪崩
234	88,12,23	サガルマータ	8,848	1	ベルギー	〔ラクバ・ドルジェ(29)〕	S コル	高山病
235	89, 3,21	ランタン・リルン	7,234	3	日	二見教行(28) 桑島泰久(23) 久本真寛(20)	4,900m	雪崩

No.	遭難日	山名	標高	人数	所属	遭難者名	遭難場所	原因
236	89, 5, 7	マナスル	8,163	1	スペイン	サンチアゴ・スアレス(34)	7,250m	滑落
237	89, 5,10	サガルマータ	8,848	1	ユーゴ	ディミタル・リュヴィスキー(35)	S・コル下	転落
238	89, 5,16	サガルマータ	8,848	1	米	[プー・ドルジェ(26)]	S・コル下	転落
239	89, 5,27	サガルマータ	8,848	5	ポーランド	M.ドンサル(36) N.ガジェシスキ(35) E.フロバック(49) G.ハインリフ(51) V.オトレンバ(41)	C1上	雪崩
240	89, 9, 6	ヒマルチュリW	7,540	1	韓	チュン・チャイホン	BC	高山病
241	89, 9,21	アンナプルナII	7,937	2	韓	キム・コンキュ(27) チョン・カプユン(26)	頂上下 ↓	行方不明
242	89, 9,下	ダウラギリI	8,167	2	仏	[スンドレ・アジバ(36) カミ・サルキ(20)]	6,700m	雪崩
243	89,10,	ダウラギリI	8,167	1	スペイン	フランセスク・タツレマセス(32)	7,600m	行方不明
244	89,10,13	ブモ・リ	7,161	4	スペイン	F.サルガド・リベラ、A.ルイス・ガレア、 F.マリア・デ・ミゲル、P.デ・ミゲル	6,400m	雪崩
245	89,10,24	ローツェ	8,516	1	ポーランド	イェジ・ククチカ(41)	8,350m	転落
246	89,10,28	アンナプルナI	8,091	2	ブルガリア	オグニアン・ストイコフ(29) ミレン・メトコフ(26)	7,500m	転落
247	89,12,12	サガルマータ	8,848	1	韓	[アン・フィンジョー(41)]	C2下	高山病
248	89,12,20	ヤルン・カン	8,505	3	韓	J.キョスプ(26) [アン・ダワ、ツェリン・ ツァンパ・ラマ]	頂上付近 ↓	行方不明
249	89,12,25	チョー・オユー	8,201	1	韓	[アン・ハクバ(26)]	6,800m	転落
250	89,12,28	ブモ・リ	7,161	1	米	ジョージ・カリー(35)	5,800m	転落
251	89,12,	ダウラギリI	8,167	3	米/加	G.バーバー(20) S.マグラス [ヌル・ワ ンチョク]	6,400m上	行方不明
252	90, 3,20	ブモ・リ	7,161	1	日	森佳邦(21)	6,200m	クレバス
253	90, 3,27	マナスル	8,163	3	米	C.シャーツ(37) N.ジャクソン(36f) [ニマ・ウォンチュク]	4,720m	雪崩
254	90, 4,29	ダウラギリI	8,167	1	独	[ワンギヤル]	6,600m	雪崩
255	90,10, 6	マナスル	8,163	3	カザフ	M.ガリエフ(29) G.ルニャコフ(35) G.ハリトフ(39)	7,000m上	転落
256	90,10, 7	サガルマータ	8,848	1	韓	ハム・サンファン(27)	南峰	行方不明
257	90,10,30	チェオ・ヒマール	6,820	1	英	[ダウ・ウォンチュク]	6,250m	転落
258	90,10,31	ダウラギリI	8,167	1	リビア	ダイニウス・マカウスカス	頂上下 ↓	行方不明
259	91, 5, 3	カンチェンジュンガ	8,586	2	スロベニア	マリヤ・フランタル(35f)、ヨジェ・ロズ マン(36)	7,600m	転落
260	91, 5,10	マナスル	8,163	1	伊/独	カール・グロースルバッチャー(29)	7,000m	滑落
261	91, 5,10	マナスル	8,163	1	同上	フリードルム・ムツェレヒナー(41)	5,700m	落雷
262	91, 9,15	ブモ・リ	7,161	2	仏	サディ・ブライム(18) [ギヤルツェン]		雪崩
263	91, 9,19	アンナプルナI	8,091	6	韓	L.サンク、L.ソクチュ [テンジン、ジャン プ、チャクバ・ディンディ、ダワ・サンゲ]	7,500m	雪崩
264	91, 9,20	アンナプルナI	8,091	1	ベルギー	ガブリエル・ドナムー(27)	頂上付近 ↓	行方不明
265	91,10, 2	マカルー	8,463	1	スペイン	マヌ・バディラオ(36)	8,400m ↓	転落
266	91,10, 8	マカルー	8,463	1	日	石坂工(26)	8,000m ↓	疲労凍死
267	91,10, 9	ブモ・リ	7,161	1	アイスランド	アリ・グナースン(30)	6,400m ↓	行方不明
268	91,10,21	チョー・オユー	8,201	1	旧ソ	ユーリー・グレベニユク(34)	7,800m	落石

No.	遭難日	山名	標高	人数	所属	遭難者名	遭難場所	原因
269	91,11,中	クスム・カングル	6,369	1	英	キャッシ・ージェサップ	5,600m	高山病
270	91,12,28	クスム・カングル	6,369	1	日	太田豪俊(48)		行方不明
271	92, 4,20	アマダブラム	6,812	1	スペイン	ホセ・ホアキン・ゴニ(36)	5,300m	転落
272	92, 4,25	カンチェンジュンガ	8,586	2	独	[ラクバ・ヌル、ドルジ]	6,600m	酸素欠乏
273	92, 4,27	サガルマータ	8,848	1	スペイン	[スッパ・シン・タマン(43)]	BC	高山病
274	92, 5, 1	サガルマータ	8,848	2	印	ディバク・クルカルニ(32) レイモンド・ジェイコブ(26)	Sコル下	疲労凍死
275	92, 5, 2	ダウラギリ I	8,167	1	独	フーベルト・ヴァインツィーレ(37)	C 3 7,000m	高山病
276	92, 5,11	プモ・リ	7,161	4	韓	S.ソンス(35) K.ベクゴレ(24) S.ユンドク(24) [バクタ・バハドゥル・ライ]	C 3 6,800m	↓ 雪崩
277	92, 5,11	ダウラギリ I	8,167	2	ルーマニア	タイナ・コリバン(48f) サンディタ・イサイラ(42f)	6,500m	行方不明
278	92, 5,13	カンチェンジュンガ	8,586	1	ポーランド	ワング・ルトキュヴィッチ(49f)	8,250m	行方不明
279	92, 5,下	サガルマータ	8,848	1	印	[ジェル・シン]	アイスF	転落
280	92, 9,15	ティリッツォ・ピーク	7,134	2	伊	ジャンルイジ・ヴィセンティン(45) ロベルト・マルガロット(25)	C 2 6,000m	雪崩
281	92,10, 2	マナスル	8,163	1	ポーランド	シルヴィア・ドモフスカ(22)	C 3 7,200m	滑落
282	92,10, 3	マナスル	8,163	1	ベルギー	スヴェン・ヴェルメイレン(23)	C 2 6,600m	滑落
283	92,10,11	アンナプルナ I	8,091	1	仏	ピエール・ベジャン(41)	7,100m	転落
284	92,10,26	アマ・ダブラム	6,812	1	ベルギー	カリーネ・ヴァン・ドーレン(35f)	C 2 下	滑落
285	92,12,18	ランタン・リルン	7,234	3	韓	K.ジンヒュン [ビル・バハドゥル・タマン、ドルジェ・タマン]	5,600m	転落 ↓
286	93, 1,15	サガルマータ	8,848	1	スペイン	[アン・ツェリン]	アイスF	クレバス
287	93, 4,24	サガルマータ	8,848	2	ネパール	パサン・ラム・シェルパ(31f) [ソナム・ツェリン]	南峰 ↓	疲労凍死
288	93, 5,10	サガルマータ	8,848	1	印	ロブサン・ツェリン・ブーティア(41)	8,200m	転落 ↓
289	93, 5,16	サガルマータ	8,848	1	韓	[アン・ジンソプ(25)]	南峰下	転落 ↓
290	93,10, 6	ダウラギリ I	8,167	1	ニュージーランド	ゲアリー・ボール(40)	7,000m	肺水腫
291	93,10, 7	サガルマータ	8,848	1	スペイン	アントニオ・ミランダ(35)	南峰下	転落
292	93,10,21	マナスル	8,163	1	ロシア	イゴール・ファミヤル(36)	7,300m	転落 ↓
293	93,10,23	マナスル	8,163	1	ロシア	セルゲイ・ヤドリシニコフ(37)	6,200m	雪崩
294	93,10,27	プモ・リ	7,161	1	米	グレゴリー・ゴードン(47)	C 2 上	滑落
295	94, 1,22	チョー・オユー	8,201	2	スイス	ジャン＝リュック・ボジール、ファン・カルロス	6,700m	行方不明
296	94, 9,26	ダウラギリ I	8,167	1	スイス	ロベルト・ペーヒラー(46)		転落
297	94,10,14	アンナプルナ III	7,555	1	スロベニア	ベノ・ドリンセク	7,000m	行方不明
298	94,10,18	ダウラギリ I	8,167	1	ウクライナ	ガリナ・チェカノワ(f)	7,000m	行方不明
299	94,10,中	カンチェンジュンガ	8,586	2	ベラルーシ	エカテリーナ・イワノフ(32f) セルゲイ・ジヴィルピワ	6,700m	雪崩
300	94,10,22	カンチェンジュンガ	8,586	1	ブルガリア	ヨルダンカ・ディミトロワ(41f)	8,300m	転落
301	94,11, 3	ピサン・ピーク	6,091	11	独	H.クロピング、M.マック、B.ネストル、S.ツシェツシェ、T.フィリップ、B.ライス(以上ドイツ) C.アミ(スイス) [チャンバ]	5,800m ↓	雪崩

No.	遭難日	山名	標高	人数	所属	遭難者名	遭難場所	原因
302	94,12,5	ドルジェ・ラクパ	6,966	1	米	カート・シュミーク	6,400m下	滑落
303	94,12,中	アンナブルナ I	8,901	1	韓	ジュン・スクビュン	BC下	転落
304	95,5,6	ローツェ	8,516	1	米	[カミ・リタ・シェルバ(23)]	7,000m	転落
305	95,5,6	マナスル	8,163	1	独	ヨルク・スタルケ(30)	7,300m	転落
306	95,5,7	マナスル	8,163	1	独	ミカエル・ツンク(36)	7,700m	↓ 行方不明
307	95,5,8	マカルー	8,463	1	豪	デビット・ビクター・ヒューム(33)	8,100m	転落 ↓
308	95,5,19	ダウラギリ I	8,167	1	独	アルブレヒト・ハンマン(45)	↓	高山病
309	95,10,4	カンチェンジュンガ	8,586	2	フランス	ブノワ・シャムー(34) ピエール・ロワイエ(43)	8,540m	行方不明
310	95,10,6	ダウラギリ I	8,167	1	日	依谷久義(45)	7,500m	↓ 滑落
311	96,5,9	サガルマータ	8,848	1	台湾	陳玉男(36)	C2上	疲労凍死
312	96,5,11	サガルマータ	8,848	4	国際	ロブ・ホール(35)、難波康子(47) ダクラス・ハンセン(42) A・ハリス(31)	Sコル上	疲労凍死
313	96,5,11	サガルマータ	8,848	2	国際	スコット・フィッシャー(40) [ナワン・シェルバ]		疲労凍死
314	96,5,25	サガルマータ	8,848	1	英	ブルース・ヘロッド(37)		
315	96,9,21	サガルマータ	8,848	3	国際	イユブ・ブシェン(47) [ロブサン・ザンブー(25) ダワ・シェルバ]	7,500m	雪崩
316	96,10,1	マナスル	8,163	1	日	小西政継(57)	7,900m	↓ 行方不明
317	96,10,8	イムジャ・ツェ	6,169	1	日	林田正幹(63)	BC	高山病
318	96,	アンナブルナIV	7,525	2	マレーシア		降雪による	窒息死
319	97,4,23	サガルマータ	8,848	1	英	マルコム・ダフ(43)	BC	高山病
320	97,4,26	イムジャ・ツェ	6,169	1	日	石井初男(35)	5,700m上	行方不明
321	97,5,21	マカルー	8,463	2	ロシア	隊員2人		
322	97,5,23	サガルマータ	8,848	1	マレーシア	[シェルバ]		転落
323	97,5,25	サガルマータ	8,848	1	米	[シェルバ]		転落
324	97,5,26	ローツェ	8,516	1	ロシア	ウラジミール・バシキーロフ(44)	8,000m下	滑落
325	97,10,8	マナスル	8,163	1	スロバキア	ミロスラフ・リバンスキー(41)	C2~C3間	↓ 高山病
326	97,10,9	マナスル	8,163	1	スロバキア	ユラト・カルドホルド(31)	↓	行方不明
327	97,10,9	ブモ・リ	7,161	1	スロバキア	3名		転落
328	97,10,中	マカルー	8,463	1	デンマーク			
329	97,10,31	ヌブツェ	7,855	1	スロベニア	ヤネス・イエグリオ(36)	↓	行方不明
330	97,11,8	ファング	7,647	1	韓	キム・イエホン(25)	7,200m	転落
331	97,12,25	アンナブルナ I	8,091	1	カザフ	アナトリー・ブクレエフ(39)	5,900m	雪崩

1905年～1997年(93年間) 総死亡者 537名

年代	総数	隊員	ポーター	L/O
1905～1959	23	13	10	0
1960～1969	25	15	10	0
1970～1979	136	87	48	1
1980～1989	229	190	38	1
1990～1997	124	99	25	0
総計	537	404	131	2

■ 寸 感 ■

驚いたことに今回のカバン峰偵察では、高山病に悩まされなかった。こんな経験はヒマラヤ登山18回目にして初めてのことである。そういえば、肺水腫になったのもヒマラヤ登山9回目のラブチェ・カン登山の折であった。そう考えると「高所医学」の解明にはまだまだ時間がかかりそうであるし、それを普及するにも時間が必要だ。(山森)

事務局日誌 (11月)

- 4日(水) カバン偵察隊帰国
アルパナ嬢サヨナラ・パーティ(山森、八木原、尾形、寺沢、中川他)
- 6日(金) 二俣勇司追悼文集が送付されてくる
- 9日(月) ヒマラヤ325号発送
- 10日(火) N. B. クリンチ氏を囲む会(山森)
- 11日(水) 橋本龍太郎先生と「山を語る会」
(キャピトル東急、山森)
- 12日(水) 原田達也氏偲ぶ会(山森、八木原)
IMF 創立40周年記念出席のため、

寺沢玲子常務理事訪印。

- 13日(金) ポカラ国際山岳博物館協議会(JA C、山森)
- 17日(火) 大森薫雄ドクターを囲む会(山森)
- 29日(日) 寺沢玲子常務理事インドから帰国
昭和三岳会創立60周年祝賀会(品川プリンス、山森、尾形、中川)
- 30日(月) 東京集会(18名)

ヒマラヤ No.326 (1月号)

平成10年12月10日印刷 11年1月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

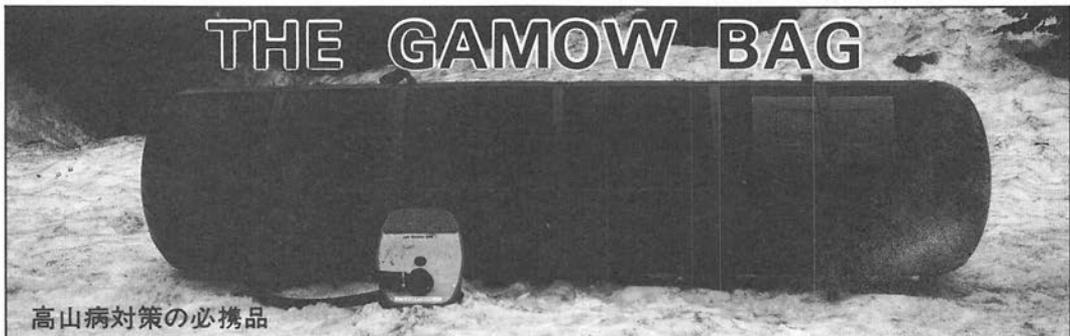
発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブランク店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブランク3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メルオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004